


 江戸
 開府
 400
 東京

《新春特集》江戸開府400年・開館10周年記念 大江戸八百八町を語る ～江戸の繁栄を築いたもの～



あけましておめでとうございます。

1月5日から江戸開府400年・開館10周年記念「大江戸八百八町展」が開催されます。江戸の町の発展、企画展の見どころなどのお話を伺いました。

出席者 小澤 弘(江戸博教授)
 原 史彦(江戸博学芸員)
 聞き手 巻渕 彰(広報部会)
 岩松 精(事業部会)



話題の日本橋繁昌絵巻『熙代勝覧』を解説する小澤弘教授(左)と原史彦学芸員

を譲ってますね。

小澤 世襲化を形にした。つまり2代目に継がせることで、江戸幕府は徳川家が継承していくというセレモニーを行ったわけです。

——開府以降、江戸の町づくりは急速に進みますが。

原 幕府を開いてから事実上の武家の頭領と見られることになり、伏見の城下にあった大名屋敷をこぞって江戸へ持ってくるのです。それで土地



ハ・イ・ラ・イト

- 新年あけましておめでとうございます。会員の皆さんとともに江戸開府400年、開館10周年の本年を明るい年としましょう。よろしくご支援、ご協力をお願い申し上げます。
- 新年ごあいさつ
竹内館長、山本友の会会長
- 新春特集「江戸開府400年・開館10周年 大江戸八百八町を語る」
—「大江戸八百八町展」の見どころ—
—1/6「会員特別観覧会」受付中!
- えど友プラザ 会員投稿のページ
- 〈江戸博クリップ〉学芸員エッセー
- [シリーズ]ミュージアムショップ
名店めぐり(3)「言問団子」
- 《事業部会だより》
・1/21 第10回セミナー「光の芸術 江戸切子」申込受付中!
・古文書講座 第3期 新規受付中
- 会員優待のお知らせ——
・企画展「大江戸八百八町」展
- この会報は、皆さんと一緒に創るコミュニケーション情報誌です。ご意見、ご要望、投稿などをお気軽にお寄せください。

江戸開府は首都東京の礎

——まず、江戸開府400年というのは、いつを基準にしているのですか。

小澤 徳川家康が征夷大将軍に任命されたのが慶長8年(1603)2月12日で、それから400年ということです。

——そのとき家康は62歳。江戸入城(八朔)は天正18年(1590)ですから13年後ですか。3年後には家忠に將軍職

申込受付中

「大江戸八百八町展」特別観覧会

- ・開催日時 1月6日(月) 18:00~20:00
受付開始 17:30
- ・会場 江戸博1階ホール/企画展示室
- ・参加費 会員限定 記念事業として「無料」
- ・申込締切 12月28日(土)必着 → 申込方法は8頁参照

無料

が足りなくなったので日比谷入江を埋め立てたりして、武家地を広げていきました。それと同時に町並みも整備していきます。

——1600年代に江戸の町づくりの基本が出来たと考えてよろしいのですか。

原 脈々とつづけられていったわけです。外濠が完成するのが寛永年間ですから、家康が来てから半世紀近くはずっと工事がつづけられていました。

——そうしますと、この開府400年というのは、東京発展の礎という位置付けでしょうか。

小澤 武蔵国の江戸は、中世から湊町でした。しかし、百万都市に育っていったのは、開府以降ですからね。それがもたらした影響は計り知れません。たとえば参勤交代が制度化されて、物心ともにネットワーク化が進みますが、これは近代社会になっても生かされたシステムです。そういう意味で見ると、非常に大きな礎になりました。

——日本橋が架けられたのも、東海道宿駅制も400年ほど前ですね。

小澤 日本橋という橋を基準にしたことが大事です。水路と陸路との接点ですから。しかも、江戸前には全国に通じる海があります。

——そうした江戸前期には、まずは城の整備から始まったのでしょうか。

原 いや、『落穂集』によると、家康は城よりも町の整備を急げといったと書いてあります。

家康が来る前の江戸は、いかにも草深いイメージですね。人家もまばらとか。そこへ神君家康公がいらっしやいまして、町を整備しろと号令して、繁栄ある大江戸ができたという話になっています。でも、これは神君家康公がいかに偉大だったかを強調するためで、実際はそんなに人家まばらな地ではなかった、というのが最近の見解です。

——それは興味深いですね。

原 室町中期に太田道灌が来て、むかしの鎌倉道などを江戸城を中心に付け替えたり、隅田川河口を拠点に押さえた物資の結節点にしました。それで、京都から文化人が訪れたとき、隅田川はすでに知られた名所になっています。つまり、それなりの町場が形成されていたわけですね。

その後、北条氏の支配下になりますが、北条氏も江戸を物流の基点として重視して、城代の遠山氏を置いています。そういう中世以来の都市機能を押さえて、家康も江戸に自分の本拠を構えたわけですね。

それで当初は徳川氏の一城下町として建設されていき、将軍になって以降は天下の総城下町へと向っていったというのが、最近の研究の流れです。

——町人の人口は。

原 慶長期の江戸は仙台と同じくらいで、15万人ほどだったようです。

中世も都市センターだった

——その頃には、商業も行われ、お金も回っていたのでしょうか。

小澤 中世にはすでに江戸入江のあたりは相当なセンターでした。頼朝が石橋山の合戦の後、下総から江戸に入って来ますが、大きな舟を並べて橋にして渡しています。それだけ多くの大舟があった証拠ですね。

入江の奥にあつて、防備や水利の問題、漁業とか、物資運送とか、そうしたことを考えて、家康はいちばんいい場所を選んだのですね。

——そして、江戸の町は城を中心に「の」の字型に発展していったそうですが、町づくりは武家地はもちろんですが、町人町をつくるというのが大きな要素だったのでしょうか。

原 城は軍団が集合している場所ですから、その軍団を養うためのさまざまな職人や商人が、ひとつのユニットとして必要だった。城に殿様や家臣がいて、その周りに付随する職人、商人がいるというのが、基本的な城下町の構造で、江戸も最初はそうだったのです。

——確かに日本橋は商人町で、京橋は職人町というようにいわれていますね。それで、人口も増えてきて、だいたい町人は50万人で一定していますか。

原 それは享保期からですね。元禄期は30万人くらい。ただし、あくまで調査で把握できた数で、実際には戸籍調査に載らない周辺部にいっぱい人がい



日本橋北詰付近の賑わい 『熙代勝覧』から(部分) ベルリン東洋美術館所蔵

た。それを合わせると、もっと多かったのでは、ともいわれています。

——小澤先生ご専門の文化とか芸術などの隆盛はいかがですか。

小澤 生活に必要な物資のほとんどは、初めは上方や大名家の国許でつくって江戸へ搬入するタイプが多かったのです。とくに上質の物は、ですが、だいたい元禄期を境に技術者が育ち、江戸でつくられるようになってきました。

たとえば江戸絵という錦絵がそうですし、西陣で織ったような高級な物でなければ、江戸でつくられるように発達してきます。それで、18世紀に入ると、上方風でなくて、江戸風というものが生まれてきます。

歌舞伎などもそうですね。荒事芸が起きてくる、けれど同時に上方の人情ものもあって、交流をしながらうまくミックスしていきます。

その頃までは「江戸名物」という諸国に自慢できるものは、あまりなかったと考えられますが、参勤交代で育まれたいろいろなネットワークや、需要を求めて職人がしのぎをけずったりして、後期にはオリジナルなものが出てくるということですね。

——江戸文化といいますが、やはり文化文政期がピークですか。

小澤 爛熟したということですね。頂点はもう少し前でしょう。浮世絵なども、江戸の後半期に大量につくられるようになって庶民レベルになっていく。それは非常に緻密でいいのですが、逆にいうと量がありすぎて、拡散するのです。

実際には享保ぐらいから寛政期あたりまでが、江戸文化がぐーんと上昇していった時だろう、と思います。

参勤交代で江戸が発展した

——では町人に焦点をあてますと、この八百八町展では江戸の発展や繁栄が基調になっていますね。

原 江戸の文化が発展していく過程で、町人の経済力がぐんぐん上がっていきますね。文化というのは、物質的な余裕と、精神的な余裕がミックスして形

成されていくのです。では、なぜそれほど経済が発展したかという、やはり一番に参勤交代制があります。これによって全国の大名が江戸に集住することになります。初期の段階では、江戸の産業は彼らを支えるほど発展していなかったの、物資はみな国許から持ってきたわけです。

たとえば、汐留で伊達藩邸が発掘されたとき面白い結果が出ました。最初の藩邸は屋敷地の半分ぐらいが船入りの港なのです。なぜそんなに広がったかという、国許の仙台から物を持って来る船が多かったからです。それが時代とともに埋め立てられていって、幕末には船2艘程度の広さに減っているのです。国許から物資を運んで来る必要がだんだんなくなってきたからです。



駿河町正月賑わいの図

——そうしますと、庶民は武家との関わりの中で商売をして、生計を維持していたということになるのですか。

小澤 最初はそうですね。

原 江戸の産業が発達していった理由のひとつに、人口の増加があります。江戸へ行けば何か職があるということ

新年のごあいさつ 歴史を顧み、歩む方向を 江戸東京博物館 館長 竹内 誠

あけましておめでとうございます。

平成15年3月28日は、江戸東京博物館の満10年の誕生日となります。当館にとって大変な節目の年であります。

また、平成15年(2003年)は、江戸に幕府が開かれた1603年から、ちょうど400年目にあたります。

庶民文化が華やかに開花し、上下水道設備や、埋め立てによる地域開発事業が展開された江戸期、そして懸命に近代国家入りを目指した東京時代。この間多くの災害や戦争も経験してきました。ここで改めて、江戸東京の歴史を顧み、これからの日本の歩む方向、私たちの生活のあり方などを考えてみる大変よい機会と思います。

「江戸東京博物館開館10周年」、「江戸開府400年」を期して、当館は、様々な企画やイベントを実施いたします。

今年3年目を迎える「友の会」の会員の皆様には、ともに参加していただき、さらに、館の発展のために一層の力強いご支援をお願い申し上げます。

あわせて、友の会のますますのご発展を期待しております。

新年のごあいさつ 意欲的に活動を推進 江戸東京博物館友の会 会長 山本 市郎

明けましておめでとうございます。

友の会発足以来2回目の新年を迎え、種々の事業活動もいよいよ軌道に乗ってまいりました。これもひとえに会員の皆様のご支援・ご協力のたまものと厚く感謝申し上げます。

また、友の会活動に対して館長をはじめ教授、学芸員ほか博物館の方々や外部講師の皆様の絶大なご指導をいただきましたことに御礼申し上げます。

本年は江戸開府400年と開館10周年の節目にあたり、博物館では数々の記念企画・催しが予定されています。当友の会もこれに沿って、さらに意欲的に活動を行っていきたい、と思っています。

当会のご承知のとおり、セミナーや見学会など各事業の企画・運営、会報『えど友』の編集、ホームページ(えど友Web)の運用、発送作業など、友の会活動はすべて、会員各位の自主的な参加によって支えられています。

友の会が年ごとに発展していきますよう祈念するとともに、本年も皆様のさらに積極的なご理解・ご協力をお願い申し上げます。

で、周辺の農村からどんどん流入してきます。また、毎日が「ハレの日」だというのです。つまり、お金だけじゃない、楽しみ、娯楽があふれています。こうして人を惹きつける魅力もあるから人が集まってくる。人が集まれば産業も発達し、文化も発展する。そして、さらに人が集まってくる。そういう構造を江戸東京の400年間、連綿とつづけてきたのです。

——封建制度の中で、そんなに人びとの流動は自由だったのですか。

原 いや、基本的には身元引受人が必要で、それがいなければ無宿人。彼らは町奉行管轄外の周辺部に住むことになります。

小澤 そういう人たちが江戸の町をさまざまな動かすシステムのパーツになります。非常にきびしい身分制度のなかに、そういう緩和策もしていたわけです。

——その当時は、町人にとって経済状態はよかったとみるのですか。

小澤 見方はいろいろですが、基本的に今でいう市民税はない。所得税もない。その代わり、大商人にはときどき上納金を出させたりしましたが、庶民にはあまり規制はなかったですね。

原 ただ、江戸町人という位置付けで町政に携わることはできなかった。それが許されたのは、家持、地持の人たちだけでした。まあ、家賃さえ払っていれば、そこそこ暮らしていけた町だったといえます。

——職人などは日銭で食べていければよいと…。

小澤 それだけの社会的環境も整っていたのでしょね。

初公開の絵巻『熙代勝覧』

——企画展の話に移りますが、「江戸から大江戸へ」のテーマは、どのような意味とねらいがあるのですか。

原 「大江戸」という言葉が生まれたのは18世紀なのですね。初めて使ったのは山東京伝あたりですが、文化的にも経済的にも上方を凌駕するようになった時期にいわれはじめた。それまでの江戸は空間的には巨大都市では

あったが、それが名実ともに「大江戸」になったという意味合いです。

それで、江戸という町がつくられてから、それがどのように発達し、日本随一の都市になっていくか、その過程を追ったものです。

——展示されるものに、寛永期の風俗人形がありますか。

原 常設展示のものに加えて、「江戸図屏風」に出てくる人物400体を展示します。サイズは30分の1で、見応えあると思います。

——次に「大江戸に住まう」のテーマでは、遠山の金さんの甲冑なども。

原 これは江戸のさまざまな要素を盛り込んだパートです。江戸八百八町といえば、一般の方のイメージでは町奉行がでてこない。

もうひとつは火事だろうということで、火消の話と、『江戸失火消防ノ景』です。これは珍しいもので、出火して火消しが出動し、消防活動をして、焼け跡の整理まで、一連の動きが描かれています。

それから湯屋のCG映像とか、長屋の暮らしなども紹介します。展示数では、ここが一番多いのです。



——いよいよ注目の絵巻『熙代勝覧』(きだいしょうらん)が見られますね。

原 最大の目玉です。「日本橋繁昌絵巻」という題で、日本へ里帰りの初公開です。江戸の町はこんなだった、という様子がよくわかります。

小澤 ベルリン東洋美術館から借りてきたもので、正月の話題になること間違いないですね。

絵巻物は30センチ幅のものが多いのですが、これは43センチという幅の広い絵巻です。長さは約12メートルほどで、今川橋から日本橋までの町並みと賑わいが描かれています。おそらく文

化2年(1805)頃の絵だろうと想定されます。文化3年には大火もありましたから。

この中に、約90軒の間屋や店(たな)と、1700人ほどの人びとの姿が描かれています。特徴的なのは、各商店の屋号や看板類、商人たちの風俗などが非常に克明に描かれていることで、史料的な価値がきわめて高いものです。店のデータなどきちんとスケッチして、細かく書き込んであり、人びとの表情も豊かですね。こうした細かいディテールを見ているとワクワクしますね。

——最後の「江戸自慢」では？

原 そういう名前の番付がありまして、それにあやかって「これが江戸だ」という4つを集めました。

1つは「大名が町に住んでいる」こと。2つ目は「将軍が祭を見物する」。3つ目に「物資の集散地」であった。4つ目が「雑踏があつて迷子ででたこと」ですね。

この展示コーナーでは、日本初公開になりますが、デトロイト美術館所蔵の等身大の「相撲の生き人形」を飾って最後を締めるという構成です。

——多彩な関連企画もありますね。

原 第2会場(学習室)では、東京伝統木版画工芸協会による歌川広重の「名所江戸百景」を100枚復刻して特別展示します。毎週土日と祝日には彫り摺りの体験をしていただく予定です。

ほかにも、学芸員による見どころ解説会やフォーラム、トークショーなどもあります。もちろん、友の会会員にも参加していただいて「特別観覧会」を開催します(詳細は1ページ参照)。



聞き手：岩松精会員(左)、巻瀾彰会員

——興味深い内容が満載で、会員の皆さんにはきっと喜んでいただけたですね。「八百八町展」が楽しみです。今日はどうもありがとうございました。

【構成】広報部会・大松麒一
「八百八町展」感想文 募集中！→7頁参照



えど友プラザ

友の会会員のページ

●最新情報は、ホームページ「えど友Web」で！

友の会の自主運営です。友の会の最新情報、お知らせ、活動予定や会報「えど友」のバックナンバー(Web版)もご覧になれます。会員のHPもご紹介します。詳細はHPを参照ください。アドレスは、<http://www.edo-tomo.jp/>

大相撲の危機(その1)

佐藤 幸彦

昨年(2002)7月場所は、幕内で休場力士が一時10名になるという、大変な事態になりました。最近引き技が批判を浴びるようになり、引き技で簡単に勝負が決まると観衆がブーイングをするようになったせいか、このところ急に激突する勝負が多くなり、そのため怪我がふえているのではないかと感じます。怪我の原因を親方衆は稽古が足りないと指摘することが多いようです。しかし最近の大相撲は、力士の体格が大型化して、勝負が危険化しているのではないかと、そのために技が単

純化して勝負がつまらなくなった【第1表】身長と体重

のではないかと思います。そのことをデータで語って見ましょう。

昭和17年(1942)春場所と平成11年(1999)秋場所のデータを比較します。前者は、双葉山・羽黒山・男女川が横綱、照国・前田山・安芸の海が大関という、筆者の子供時代としては、大相撲を最も楽しんだ時代です。後者は近年の、曙・若の花・武蔵丸・貴の花が横綱として出場していた場所です。力士の数は横綱以下十両まで54名を採ります。現在の幕内力士は40名ですが、昭和17年当時は東西制だったので、幕内力士は54名でした。(以下それぞれの場所を1942、1999と記します) まず身長・体重の比較です。【第1表】

即ち平均体重は46kgふえ、平均身長は8cm高くなっており、1999年の平均

体重は、何と1942年の最大体重より11kgも重いのです。体重のバラツキはパーセントで表しても大きくなっています。これでは大きい力士は自重で壊れ、小さい力士は大きい力士につぶされて壊れる確率が昔よりも格段に高くなることが明らかです。

次に幕内の

年	身長(cm)		体重(kg)	
	1942	1999	1942	1999
平均	176.2	184	106.9	153
最大	190.9	204	142.5	233
最小	166.7	171	82.5	101
標準偏差%	3.4	3.2	14.0	16.7

勝負の決まり手を検討してみます。幕内の取組数は1942年が384番、1999年が279番でした。(不戦勝を除く)使われた決まり手の種類は1942年が43種、1999年が26種でした。この数字を見ただけでも昔の相撲の方が面白かったような気がします。さらに決まり手の分布をデータで見てみましょう。【第2表】

第2表の他に1942年には足取り、三所攻め、渡し込み、小股掬い、内無双、とったり、二枚蹴り等各一番がありました。次号ではこの表について吟味しますが、読者の皆様もまずはこのデータを睨んでいろいろご検討下さい。

【第2表】決まり手の分布

決まり手	1942		1999	
	件数	%	件数	%
寄り、寄り倒、押出、浴倒	144	37.5	152	54.5
突出、突倒、突放	39	10.2	8	2.9
吊出、極出、極倒	22	5.7	2	—
送出、送倒	2	—	19	6.8
内掛、外掛	24	6.3	1	—
投げ(上手、下手、小手、掬い、首、櫓、上手出、下手出)	56	14.6	29	10.3
突落、巻落	18	4.7	18	6.5
叩き込、肩すかし、引落とし等	35	9.1	47	16.8
ひねり(上手、下手、腕、首)	13	3.4	3	1.1
打棄り	10	2.6	0	—
切返し	5	1.3	0	—



図:写楽画「大童山土俵入」から(部分)【模写】野坂紘子

江戸博クリップ

友の会の 推進力に敬服

学芸員 高波真知子

一昨年(2001)の4月に、18年間勤めていた東京都庭園美術館から友の会事務局がある江戸博普及係に異動してきました。

江戸博友の会も、役員の方をはじめ会員さんに恵まれて順調なスタートをきったところでした。ところが私の

ほうは、同じ東京都歴史文化財団内の博物館とはいえ、専門がまったく異なる館の異動で右も左もわからないという状態…。不慣れな上に、会員層もいままで接する機会の少なかった、江戸の歴史や古文書好きの人生経験豊かな男性が中心。

庭園美術館は西洋館に庭園がついた東京都指定の歴史的建造物を使用する美術館で、来館者のほとんどが4、50代の女性です。正直なところ友の会担当の役目を果たせるのかと不安でした。

しかし、江戸博友の会の最大の特徴は館から独立した任意団体。会員

の意識も高く、2年目にしてすでに自立した友の会活動の運営を軌道に乗せています。事務局担当の江戸博スタッフは少数!精鋭?で、友の会が館を基盤に活動するためのパイプ役を務めています。

見学会やセミナー、会報誌『えど友』も会員さんの手によるものです。その推進力を支える情熱にはいつも敬服しきりです。一方で、友の会は生身の人々と接する機会が多くあります。時には湯あたりならぬ「人あたり」しそうになりながら、悲喜こもごも、楽しみながら日々努めております。

◆このコラムは学芸員が執筆しています。

月を見に向島百花園へ

野坂 紘子

亀戸から電車で東武伊勢崎線・東向島駅へ。手前は曳舟、低い町並みがつづく。金魚鉢の底にいるようなうっとうしさもあるが、人情の機微があり、女の子はすっきりときれい。

こちら辺に来ると、下町だなと思う。今日は百花園で月見がある。母は子供のころはそばに住んで遊び場だったとか、伯母夫婦は結婚式の後でそこで写真を撮ったとか聞いているのだが、私は行ったことがない。以前にバラの育て方の講習を受けに行ったら、担当の方が百花園の庭師さんで、良い方だったので一度は行かなきゃと思ってはいた。で、このこと訪れる。左手に青々と芭蕉のある門を入ると、私の背よりも高く草が茂っている。

「えーっ、田舎じゃん!」と思う。名園と聞いているのに、都の財政難で手が回らないのかと思ってしまうほどだ。大名庭園や西洋庭園を見慣れた目に

は、びっくりするような緑の扱い方。アザミやススキ、シオン、フジバカマ、マンジュシャゲまでも、まあ所狭しと茂っている。

名物の萩のトンネルをくぐると、ふんわり良い匂い。葛をからませた棚、藤をからませた棚、緑に包まれてしまう。花もやさしい。草もやさしい。目にやさしい。心にやさしい。もう少しカチッと決めてあれば、酒井抱一の絵に似かよっているかなと思う。ここを北野屋平兵衛(佐原鞠鳩[きくう])さんは秋芳園と自称されたとのこと。

ちなみに、秋の野の花々で満ちているこの優美な庭が造られた文化2年(1805)、亀戸の船橋屋さんも創業。同じころ、友の会古文書講座の西村氏の講義によれば「作州久瀬(現岡山県真庭郡久世町)では村人たちは閑院宮からの借金銀十三貫五百匁が返却できずに困っていた」そうです。

ともあれ、憂世は忘れましょう。5時から月見団子のお供え。紺の半纏の若衆たちが立ち働いている。お供えを飾る台、ろうそく立て、ススキを活ける花立て、野菜や団子をのせる台、みな細いの太いの、真新しい切りたての青竹を組んである。すがすがしい。

芋の葉の上に里芋、さつま芋、柿、

栗、枝豆。お団子は大福のようで3Lぐらいか。こんな大きな初めて見た。昔、家でススキと団子でお飾りをしていたが、もちっと小さかったのと、大きな真っ白い団子を見る。おいしそう。お酒も徳利で供えられているが、その向うに主役の月はまだ登っていない。

ブラブラと園内を歩くと、大日本茶道会の方たちが茶会をしている。荒々しい杉皮ぶきの屋根に、すり鉢のようなのが載せてある東屋のところで、中高年の女の人たちがたくさん順番を待っている。

私もまぜてもらおうと、手造りの緑の地に月と兎の団扇が配られ、待ちわびているうち夕闇が濃くなり、あちこちで虫がすずく。頭の上でコロコロリーンと玉をころがすような虫の音が聞こえてくる。隣席の埼玉から来たという女の方が「あー、来てよかったわ」とおっしゃる。緑の中で居心地よくしていると、確かに私もそう思う。お茶菓子は兎のおまんじゅう。花は斑入りのススキの葉とシュウカイドウ。お茶碗には秋あかねが飛んでいる。

亭主は笑くぼの可愛い方。お薄をおいしくいただいて、またブラブラ。お座敷のほうには表千家の方たちか、こちらにも女性が多い。着慣れた着物姿

の立ち居は幼い昔に戻ったような気持ちになる。暗い中そだけあくまで明るい。年増の嫦娥(じょうが)たち。花火どきの若い娘たちのYUKATAを除けば、お正月でも和服の方を見かけることが少ないので、久しぶり日本している感じ。

ちょっと小腹が空いたので、おでんとお酒と茶飯を頼む。東京でもはじこのほうから来てるので、多すぎず少なすぎずのご飯のほどの良さが粹だねーと妙にうれしい。と、目の前にぽっかりと月が浮かぶ。思わず立ち上がってしまった。

お運びの女の子が「お月さま」とつぶやく。売店には竹で編んで和紙を貼ったきれいな絵の描いてある灯籠3500円も売っている。風流なものです。

お琴の演奏も始まる。品の良い年配の先生は朽葉色、お弟子のお嬢さんたちはそれぞれ華やかに、コロリンシャンと爪弾く。曲は希望の光。お月見パーティはいよいよ佳境に入る。和や

～特集～「大江戸八百八町展を見て」 感想文・観覧記をお寄せください！

今回の投稿特集テーマは「大江戸八百八町展」。

企画展をご覧になった感想文や観覧記を募集します。江戸開府から400年、開館10周年の特別記念展でもあります。話題の『熙代勝覧』絵巻も初公開です。この企画展に関連した事柄をご寄稿ください。

◆テーマ投稿要領

短文(表題も)を、手紙かハガキ、HPからメールで投稿。イラスト・図版や写真も歓迎。採用分には記念品進呈。応募締切:1月末日。会員番号、〒住所、氏名、年齢、電話番号を明記。友の会事務局「投稿」係あて。

かな雰囲気が悪くない。

いざともに月を見ん。

また、ブラブラとひょうたん池をめぐり歩く。傍らのベンチにお弁当持参で楽しむ男の方たちもいる。角灯籠の明かりは淡く、闇はますます深くなる。お供えの前に行ってみるとススキとススキの間に、まんまるの月が煌々と輝いている。まるで私のために照っているよう。

百花園の月は文句なく美しい。この

世の福に満ちている。哀しさよりも楽しさに。

月兎とんでひょうたん萩・薄
なんか飲みすぎの句をひねって、帰りがけ門の外で日本一のキビ団子5本250円というのを買って、さっきのお茶会で一緒だったたっぷり肥りじしの御夫人らにおすそわけ。

団子に始まり団子に終わって、ほんに今宵は大吉日。

江戸東京博物館ミュージアムショップ 名店めぐり<3>

江戸の味を今に「言問団子」

お正月の墨田七福神めぐりのコースにも入っている言問団子さんを、隅田川に架かる桜橋際のお店を訪ねました。

向島のこの辺りは、江戸時代から「墨堤の桜」としてよく知られた桜の名所。このため、季節になると花見を兼ねて多くの方が行楽に訪れ、言問団子の名も広く知られるようになりました。

その名の由来は、皆さんご存じのように、在原業平が詠んだ有名な和歌名にしおはゞ言問はむ都鳥
我が思ふ人はありやなしやと
からきています。

この古事に感銘をうけた初代が、現在の地に業平神社をまつり、この辺り

が言問ヶ岡と呼ばれるようになったそうです。

団子の始まりも江戸のむかし。たまたま通りかかった杖をついた老人に請われて、手づくりの団子とお茶をだしたところ、大いに喜ばれ、これが評判になって名物として知られるようになったとか。当主は第6代目の外山和男さんです。

言問団子の特徴は、串団子ではなく一つずつになっていることです。小豆餡(あん)で包んだもの、白餡で包んだもの、クチナシの色粉で青黄色につくり、中に味噌餡を入れたものの3種類があります。この他に都鳥をかたどった言問最中もあります。味は非常に上品



(写真)6代目当主の外山和男氏
(上)向島本店 東京都墨田区向島5-5-22



で、これが160年以上続いた所以と思われる。

お客様の層は老若男女を問わずファンの方が来られます。また近ごろでは、外国から見えたお客様にも喜ばれているといわれます。

いまは近くに高速道路が通り、言問ヶ岡の面影は見られませんが、味はしっかりと伝統を守っておられます。

なお、近くには向島百花園もあり、七福神めぐりを兼ねての散策もよいでしょう。

【取材】広報部会・岡橋園子

事業部会 だより

友の会セミナー

申込受付中

第10回「光の芸術 江戸切子」

講師：須田 秀石(江東区登録無形文化財)

- ・開催日：1月21日(火) 18:00~19:30
- ・申込締切：1月15日(水) 必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
- ・定員：100名(会員本人に限る)
- ・参加費：200円(当日払い)

色と光の交差が生み出す江戸切子の魅力——。その歴史や系統を江戸時代から今日までとどろき、高級カットグラス一筋の職人としての思い出なども語る。

講師略歴：すだ・しゅうせき

江戸切子職人。大正13年(1924)墨田区向島に生まれる。同郷の堀口市雄に師事し、昭和60年(1985)に堀口硝子の名跡「秀石」を継承。平成2年(1990)「秀石」の名で工房を開く。平成3年(1991)江東区の登録無形文化財に指定。

古文書講座(第3期)

新規受付中

- * 第1期、第2期受講者は継続になります。(申込不要)
- * 両講座の新規申込可

◆古文書講座入門編第3期

- 第1回 1/8(水) 14:00-16:00
- 第2回 2/12(水) 14:00-16:00
- 第3回 3/19(水) 14:00-16:00
- ・会場 江戸博 1階会議室
- ・講師 西村慎太郎
- ・新規申込締切 1/5(日)
- ・参加費 全3回1,000円(初回払)

◆古文書講座初級編第3期

- 第1回 1/15(水) 14:00-16:00
- 第2回 2/19(水) 14:00-16:00
- 第3回 3/26(水) 14:00-16:00
- ・会場 江戸博 1階会議室
- ・講師 小宮山敏和
- ・新規申込締切 1/10(金)
- ・参加費 全3回1,000円(初回払)

【今後の予定】

◆創作講座

「江戸手描友禅」

- ・3/21(金) 午前・午後 各1回
- ・講師：佐藤平八工房

◆友の会セミナー

- 第11回「明治時代の女子学生
～大山捨松を中心として～」
- ・3/27(木) 18:00-19:30
- ・講師：久野明子

講座受講 申込方法

申込方法が
変わりました!

● 通常ハガキでお申込ください。返信連絡はいたしません。申込済の方は当日、受付で登録ください。事前申し込みがないと受講できません。必ず申し込みをしてからご参加ください。

▼申込方法：

通常ハガキに《開催日「テーマ名」応募》と、
①会員番号②氏名③〒住所④電話番号を明記。会報、友の会のご感想・ご要望もどうぞ。

・各講座ごと、会員本人限定、1人1通。

▼申込先：130-0015東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局あて
▼締め切り：各講座案内を参照(必着)

会員優待のお知らせ

【企画展】江戸開府400年 開館10周年記念

大江戸八百八町 展

会期 1月5日(日)～2月23日(日)

月曜休館(1/6・1/13は開館、1/14は閉館)

- 会員： 一般450円、65歳以上220円、大専門生360円
- 同行者： 一般720円、65歳以上360円、大専門生580円
- ◆図録『大江戸八百八町』
- 会員10%割引 定価未定 会員証提示

《次回企画展 予告》

江戸開府400年記念・開館10周年記念企画展
「江戸東京もの」がたり 展 2003/3/6(木)～3/30(日)

活動に参加しよう 各部会員を募集!

事業部会：事業の企画・運営、広報部会：〈えど友〉の編集・PR活動、総務部会：各種案内の発送・受付
ハガキに、希望部会名、会員番号、〒住所、氏名、電話、応募事由、を記載して、事務局までご応募ください。



次号は3月1日発行予定です。
<http://www.edo-tomo.jp/>

江戸東京博物館友の会
会報〈えど友〉第11号

発行日 平成15年(2003)1月1日
発行 江戸東京博物館友の会事務局
130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
Tel. 03-3626-9910

編集・制作 友の会広報部会
発行・編集人／佐山彪(事務局長) 編集主幹／大松駿一
編集／岡橋園子、菅沼和男、佐藤幸彦、貝森武夫、
上山英昭、野坂純子、小柳英二郎 レイアウト／巻瀾彰